

短期プログラムにおける活動間の連携の可能性 —日本語授業・交流授業・文化講義・文化体験の有機的な結びつき—

阿部 美恵子（関西学院大学日本語教育センター）

釜淵 優子（関西学院大学日本語教育センター）

吉兼 奈津子（関西学院大学日本語教育センター）

柳 圭相（関西学院大学言語教育研究センター）

In the short-term Japanese language and culture courses of 2013 academic year, Japanese language classes, exchange classes with Japanese students, lectures on Japanese culture held in Korean language, and Japanese cultural experiences were planned and implemented together, rather than individually. After the program was completed, a questionnaire survey was administered to the participating students and evaluation for the program as a whole, each activity, and the collaborative activities, were all rated highly. In addition, almost all the students responded that by joining this program, they were able to improve their Japanese, gain a deeper understanding of Japanese culture, and make Japanese friends. These results indicate that seamlessly linking activities together proves to be an effective way to satisfy the students of a short-term program.

キーワード：短期プログラム、交流授業、日本語パートナー、日本文化

1. はじめに

本学では2011年度より韓国の協定校の学生を対象に、短期日本語・日本文化学習コース¹（以下、短期プログラム）を実施してきた。これまで2011年度夏季・冬季、2012年度夏季・冬季、2013年度冬季の計5回実施し、日本語と日本文化の学習、日本人学生との交流が短期間で進むよう、プログラム内容を改訂してきた。

短期プログラムの拡充が求められる中で、2014年度以降は対象を韓国以外の協定校にも広げて実施することとなった。そこで、これまでの短期プログラムを振り返り、今後の短期プログラムの内容を考える上での一助としたい。

本稿では、2013年度の短期プログラムで各活動を有機的に結びつけた工夫について述べる。そして受講生を対象に行ったアンケート調査の結果から、短期プログラム参加によって受講生がどのような変化を感じたのか、各活動が結びついた内容のプログ

¹ 2011年度は「短期集中日本語・日本文化体験コース」として実施した。

ラムが有効だったのか、検討する。

2. プログラムの概要

短期プログラムでは、(1)実用的な日本語を習得し、実生活において日本人との日本語によるコミュニケーション能力を高める、(2)与えられたテーマについて自分の考えを日本語で発表することにより、日本語による自己表現能力の育成を図る、(3)現代の日本の若者文化（POPカルチャー）と食文化への知識と興味を高め、日本文化への理解を深めることの3点を目標としており、日本人との交流も重視している（阿部 2012、阿部 2013）。

表1 短期プログラムスケジュール

日数	月日	曜日	1時限	2時限	3時限	4時限
1	2月9日	日	来日			
2	2月10日	月	プレイズメントテスト	オリエンテーション・歓迎会	キャンパスツアー	
3	2月11日	火	日本語1 自己紹介をする	日本語2 食事をする	交流授業1 お互いのことを知る	
4	2月12日	水	日本語3 買い物する①	日本語4 買い物する②	交流授業2 買い物に行く	
5	2月13日	木	文化講義1（韓国語） J-POP	文化講義2（韓国語） J-POP		
6	2月14日	金	日本語5 自分の1日について話す①	日本語6 自分の1日について話す②	文化講義3（韓国語） 京都	
7	2月15日	土	文化体験 京都フィールドトリップ			
8	2月16日	日	自由行動			
9	2月17日	月	日本語7 旅行する①	日本語8 旅行する②		
10	2月18日	火	日本語9 感想を述べる①	日本語10 感想を述べる②	伝統文化体験 ※単位外 能楽部	
11	2月19日	水	日本語11 テスト、手紙を書く	交流授業3 手紙を書く		
12	2月20日	木	日本語12 J-POPについて語る①	日本語13 J-POPについて語る②	伝統文化体験 ※単位外 書道	伝統文化体験 ※単位外 生け花部
13	2月21日	金	日本語14 J-POPについて語る③	日本語15 J-POPについてのミニ発表		
14	2月22日	土	自由行動			
15	2月23日	日	自由行動			
16	2月24日	月	日本語16 COOL JAPANについて語る①	交流授業4 Cool Japanを見つけに行く		
17	2月25日	火	日本語17 COOL JAPANについて語る②	日本語18 Cool Japan発表準備①		
18	2月26日	水	日本語19 Cool Japa発表準備②	日本語20 Cool Japan発表会	終了式	送別会
19	2月27日	木	離日			

2013 年度冬季の短期プログラムは、韓国の協定校を対象に初級（来日前にひらがな・カタカナの読み書きができること）と中級（日本語能力試験 N4 合格程度）の2

クラスで受講生を募集し²、24名の受講生を受け入れた。受講生の母語は全員韓国語である。来日翌日にプレイスメントテストを実施し、初級クラス15名と中級クラス9名に分けた。

表1に短期プログラムのスケジュールを示す。プログラム前半の日本語授業では上記目標の(1)、後半は(2)を、文化講義では(3)を目指している。表1の網掛け部分は本学の日本人学生との交流を行う活動で、受講生の滞在中の生活、勉強、日本語のサポートをする本学の日本人学生（以下、日本語パートナー）との交流活動、本学で活動を行っている文化部やボランティア学生等に依頼した伝統文化体験の2つの活動である。

短期プログラムでは、日本語のテストや日本語による口頭発表、文化講義での韓国語のレポート、出欠等で評価を行い、単位認定を行った。

3. プログラム全体の特徴

3.1. 各活動間の連携

短期プログラムは約3週間のプログラムだが、授業は2週間少しのごく短い期間しかない。この短期間に日本語や日本文化について習得し、理解を深められるようにするために、日本語の授業と日本語パートナーとの交流授業、日本文化講義、日本文化体験とが別個の活動として行われるのではなく、各活動で学ぶことがその他の活動に結びつくようにプログラムを設計した（図1）。

プログラム前半の日本語授業は場面・機能シラバスで実施し、短期プログラムの間に実生活で必要となる日本語を学んだ。また、授業で学んだことを実際に使う練習ができるよう、交流授業を組み込んだ。日本語授業で「自己紹介する」「食事する」を学んだ日は、日本語パートナーと一緒に食事をするすることで、注文する際の日本語の練習となる。その後、お互いのことを知るタスクを行った。タスクの中に好きな歌手を訪ねる質問項目を含めた。これは後半の「J-POP」の活動につなげるためである。このタスクは授業の中で学んだ自己紹介の練習となるだけでなく、初級の受講生にとってはタスクシートに相手の情報を記入することがひらがな・カタカナの練習にもなる。「買い物する」を学んだ日は、日本語パートナーと郵便局、デパートで買い物をした。郵便局では切手を購入し、デパートでは絵はがきやレターセットを購入することで、買い物場面の日本語を使うことができる。この日購入した切手と絵はがき／レターセットは「手紙を書く」という活動に用いる。「手紙を書く」活動では、日本語パートナーにサポートをしてもらいながら、クラスを担当している日本語教員に手紙を書き、投函した。2012年度の短期プログラムまでは日本語授業で日本語パートナーに手紙を書くという活動を行っていたが、受講生と日本語パートナーはSNSを用いて交流

² 実際には、ひらがな・カタカナが読めない受講生や上級レベルの受講生も含まれていた。

しており、手紙を書く必然性がなかった。そのため、日本語授業で書き方のみを学び、実際に手紙を書く作業は日本語パートナーにサポートしてもらいながら日本語教員に手紙を書くことで、日本語で手紙を書く必然性が生じるようにした。投函された手紙が担当教員の元に届くため、学習成果も確認できるというメリットもあった。

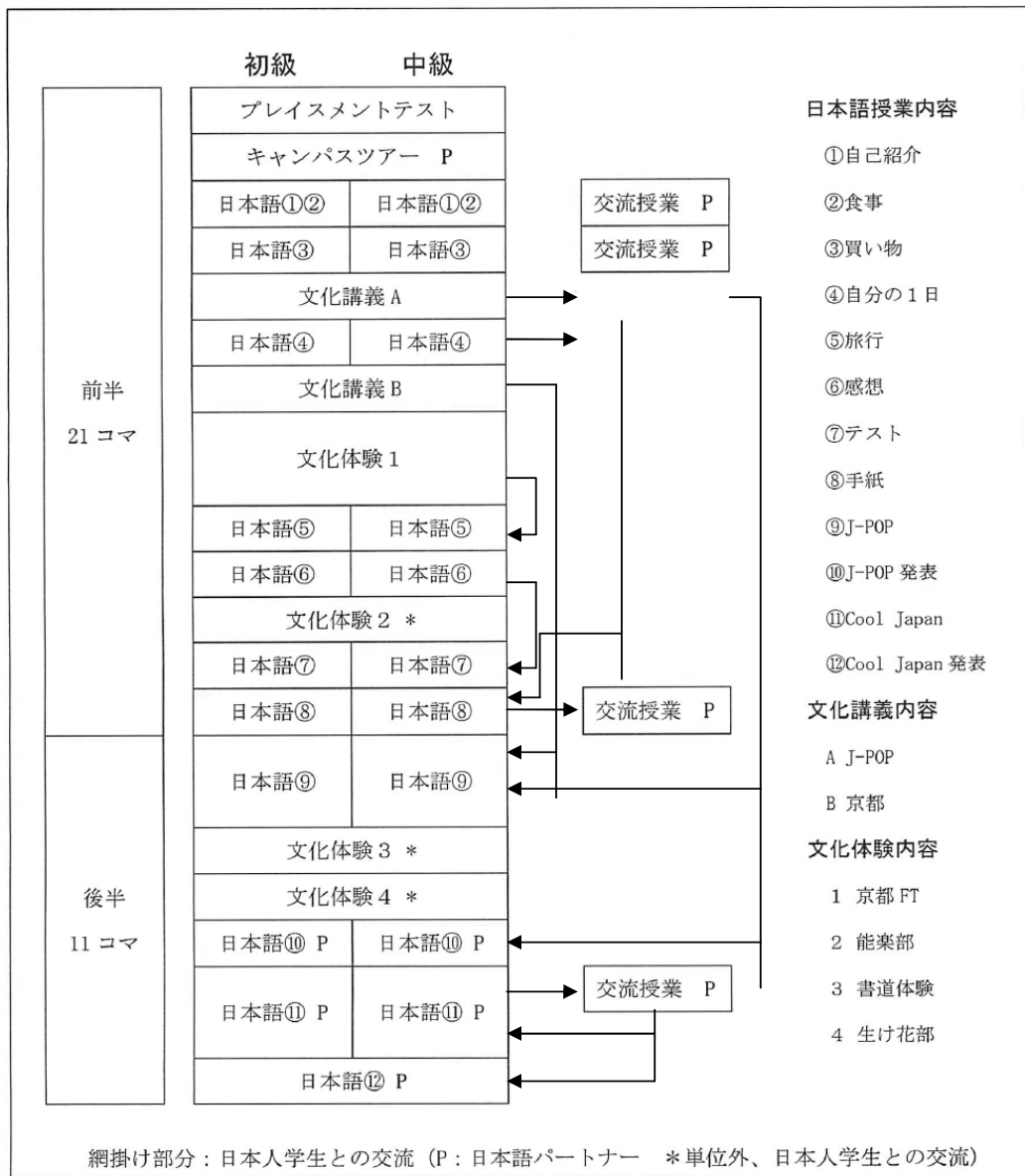


図1 各活動間の連携の構造イメージ

プログラム後半の日本語授業は2回の口頭発表を行うにあたり、発表や準備に日本語パートナーが関わった。「J-POP」の発表では、発表会に日本語パートナーが参加

した。また、後半の授業実施前に J・POP について韓国語で文化講義を行い、後半の授業の動機づけとなるようにした。文化講義の内容は事前に担当者から日本語授業担当教員へ伝え、情報を共有した。「Cool Japan」の発表では、受講生と日本語パートナーと一緒に学内外で Cool なものを見つけて写真に収めてくるという活動を行った。また、PPT の作成や原稿執筆を行う日本語授業に日本語パートナーが参加し、発表練習等の準備をサポートした。さらに合同発表会には日本語パートナーや本学の教職員が参加し質疑を行った。

文化体験の京都フィールドトリップでは、友禅染体験、昼食（和食）、金閣寺見学、和菓子作り体験を行った。文化体験前には韓国語による文化講義で友禅染、食文化（京料理の盛り付け、和菓子）、金閣寺について学んだ。文化体験後の日本語の授業で文化体験についての「感想を述べる」ことを学び、単に楽しい体験に終わるのではなく、文化体験・文化講義・日本語授業が結びつくように計画した。

このように日本語授業、日本語パートナーとの交流授業、韓国語による文化講義、日本文化体験が有機的に結びつくようにスケジュールを組み、プログラムを実施した。

3.2 学生対応

短期プログラムに参加する受講生に本学の学籍を与え、学内施設や PC、Wi-Fi 等の設備が使用できるようにした。短期間であっても本プログラムに参加中は、本学の他の学生と同じサービスが受けられた。

オリエンテーションでの説明は韓国語通訳を介して行い、授業スケジュール等の配布資料はすべて韓国語訳をつけることで、説明がわからないということのないようにした。また、通学初日には回数券購入サポート、キャンパスツアーやホテルまでの帰宅サポートを行うことで、日常生活に困らないようにした。

授業担当教員だけでなく、コーディネーターと担当職員がほぼ毎日教室に顔を出し、受講生の様子を確認した。体調管理にも気を配り、必要に応じて薬局や病院の紹介、欠席学生にはホテルへの確認を行う等、配慮を行った。

フィールドトリップにもコーディネーターと担当職員が参加した。このようにコーディネーターと担当職員が受講生に接する機会を増やすことで、相談や要求に応えやすい環境を整えた。

授業最終日に職員対応について尋ねたところ、ほぼ全員が「大変満足」「満足」と答え、「いつも親切に対応して下さって、より楽しく研修を楽しめたと思う」というコメントがあった。これらのことから、受講生は本プログラムでの学生対応に満足していると言えよう。

4. 個別活動の内容

4.1 日本語クラス

本プログラムの日本語クラスにおける授業内のトピックは、初級・中級両クラス共通のものであり、トピックは「食事をする」、「買い物をする」、「旅行する」等である。授業の最後に行う合同発表会に向けて、日本語クラス内で行うタスクの難易度を段階的に上げた。タスクは「会話（ロールプレイ）」→「モノログ（一人で話す）」→「グループ作業及び発表」→「個人発表（練習）」→「個人発表（最終）」とし、両クラスそれぞれのレベルに応じて、最終発表へ向けた口頭能力の強化を行った。その際、タスクの説明などは適宜合同で行い、中級クラスの学生が教員の説明を通訳するなどして、タスクに対する理解が受講生の日本語レベルによらないよう配慮した。

また、最終の合同発表会においては、各自の発表内容が他の受講生にも理解できるよう、PPT資料のタイトルやキーワードについては韓国語を併記した。最終発表の評価についても、各クラスの教員が行うほかに発表の聴衆全員による投票を行い、初級・中級それぞれ上位2名に対して表彰を行う等、最終発表の達成感およびコースの一体感を高めるよう工夫した。

4.1.1 日本語初級クラス

初級クラスでは、市販の『みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説 韓国語版』、『新装版 はじめのいっぽ 英語版 CD-ROM 付』等をもとに作成した教材を用いて授業を行った。本教材は、受講生や授業のトピックに合わせて、これまでの短期プログラム担当教員が改良を重ねてきたものである。

初級クラスの受講生は、ほぼゼロ初級から漢字も初級文法も少し学習したことのあるレベルまで幅広く、プログラムスタート時には日本語能力の差が見られた。

これを踏まえ、プログラム前半の授業では、毎回前回の学習内容に関する小テストの実施、その日学習する語彙・表現・文法項目の導入・練習後、それらの学習内容を、グループワーク等を通して練習を行い、各々のレベルに応じた日本語が使えるように工夫した。例えば、「旅行する」というトピックの授業では、関連語彙や文法等を導入後、グループごとに実際に行きたい旅行行程を模造紙に日本語で書き、ポスターを完成した。初級クラスでは日本語使用に限界があるため、旅行行程の情報検索には、教員が用意した韓国語版、英語版、日本語版の旅行パンフレットと地図、韓国語入力可能なPCを活用した。ポスター完成後は、旅行行程が一人で発表できるようにグループで練習した。このようなタスクを通して、一人では困難と思われる発表もグループメンバーの協力のもとにうまく一人で発表できるまでになったり、授業外で学んだ表現・文法事項・日本に関する知識等を応用していきいきと発表したりというように、受講生各自の日本語能力を十分生かした活動ができた。また、日本語での発表経

験がない学生にとっては、少人数の前であまり緊張せずに発表ができる良い機会となった。

プログラム後半では、最終日の個人発表に向け、まとまりのある長さで日本語を使って発表できるように授業を行った。初級クラスの発表では、自分が興味のあることを、日本語で誤解なく相手に伝えられるように PPT で発表することを目標とした。まず、授業では、関連語彙や文法事項等を導入後、スピーチ例を掲載したアウトラインシートを使い、各自でスピーチ原稿を作成してもらった。原稿作成には、韓国語入力可能な PC でインターネット上の辞書を利用できるようにした。その後、発音、声の大きさ、速さ等に注意しながら原稿を読む練習を行い、本番に臨んだ。その結果、「Cool Japan」の発表では、「CD レンタルショップ」、「抹茶のお菓子」、「きおくのなかのけしき」といったように、初級でも PPT を使いながら、自分の興味のあることについて独自性のある発表をすることができた。

初級クラスの雰囲気は良いもので、授業がスムーズに進められた。受講生のほとんどが同一大学出身でありながら、その多くがほぼ初対面であった。しかし、ペアやグループになって授業の課題をこなしていく中で、お互い協力的で良い関係を構築していったようであった。

初級クラスの評価は、プログラム前半はテスト（語彙、表現、文法、聴解）、プログラム後半は発表を通して口頭能力評価（発音、声の大きさ、速さ、内容）等で行った。

4.1.2 日本語中級クラス

中級クラスの受講生は、実際には初級後半から中上級まですべてを含んでいたため、特定の教材は使用せずに、常に日本の生情報を扱うようなタスクの構成を行い、どのレベルの受講生にも日本滞在ならではのプログラムだと有意義に感じてもらえるよう心掛けた。

まず、プログラム前半のトピック別学習の例をいくつか挙げる。「買い物する」では、実際のファッション雑誌などを各グループに数冊ずつ渡し、各自買いたいもの、興味があるものを切り貼りしたコラージュを作成した。その際、値段、買いたい理由等を併記し、最後に一人ずつコラージュを見せながら「私が買いたいもの」の発表を行った。このようなタスクには、いわゆる買い物表現以外にも、色、形などに関する実用的な表現（例：ふわっとした、つやつやしている等）が受講生からの質問に回答する形で自然に学習できるメリットがある。また、「旅行する」では、グループ毎に PC を使用し、実際の日本国内の旅行情報を検索しながら、週末旅行の旅行行程表とポスターを模造紙で作成、発表した。その際、検索は日本語を使用した日本語ページのみとし、旅行関連の表現などの学習とともに、授業後半の最終発表へ向けた日本語を

使って情報検索をする練習を行った。

次に、プログラム後半の口頭発表では、中級クラスはただ情報が伝わるだけでなく、制限時間（3分）以内で分かりやすく伝えることを目標とした。PPTを使った発表でも、スピーチアウトラインシートを併用することで、伝わりやすい流れの確認や、原稿チェック、完成原稿の読み練習（時間計測）などを何度も行った。最終発表当日には、「Cool Japan」というテーマで「マンホール」、「ゆるキャラ」、「日本のお菓子」など、各自バラエティーに富んだ興味深い内容について、伝え方にも各自工夫を凝らした発表を行うことができた。

全体を通したクラスの雰囲気は、各自積極的に課題に取り組み、グループ活動などにおいても、制作物（模造紙ポスター等）の完成度をもっと高めたいとリクエストが出るほど活発なものであった。数人の受講生にとっては中級クラスのタスクは難しい様子だったが、周りの受講生の協力や本人の努力で乗り越えることができた。

中級クラスの評価は、プログラム前半はテスト（聴解、文法、作文）、プログラム後半は発表を通して口頭能力評価（発表内容、構成、制限時間、分かりやすさ）等で行った。

4.2 日本語パートナーとの活動

交流活動には日本語パートナー13名が参加した。日本語パートナーは書類選考を行い、採用後は事前講義・オリエンテーションを実施し、プログラムの目的や内容を理解した上で活動できるようにした。各活動の前に日本語パートナーを集合させ、出欠管理と当日の活動上の注意をした。特に日本語パートナー以外との接触が必要になる活動（食事、買い物等）では、日本語パートナーが主導権を握るのではなく、受講生に日本語を使って会話をする機会を与えるように注意を行った。

日本語パートナーと受講生の双方に、交流授業の前のキャンパスツアーを含め、各交流授業では、できるだけ日本語で会話するように伝えた。特に初級にはひらがな・カタカナのみを独学して短期プログラムに参加した受講生もいるため、日本語のみの会話はもちろん難しい。しかし、習ったことや知っていることはできるだけ韓国語や英語に頼らず日本語で会話をするように促した。

4.3 日本文化講義

本プログラムの特徴の一つはコース名にも銘打っているように、日本語のみならず日本文化の学習にも重きを置いているところである。短期留学の場合、長期留学とは異なり、参加目的として日本語の学習が必ずしも最優先に挙げられるとは限らない。その代わりに、様々な日本文化を学んで直接体験し、いろんな所にも足を運んでみたいという希望も高いように見受けられる。このような受講生のニーズに答える一方、

文化講義をきっかけに日本の文化にさらに興味を持ってもらうことで日本語学習の動機づけにつながる効果も期待できる。

文化講義で取り上げたトピックは「J-POP」と「京都」である。日本の音楽や漫画、ファッションといった POP カルチャーは、今や世界的にも注目を浴びており、これらへの興味から日本語を学んだり、日本への留学や訪問を希望したりする若者も増えている。特に J-POP は、音楽はもちろん、映像、アーティストのキャラクターやファッション、それに加えてアニメーションとの関わりなど、現代日本のサブカルチャーを理解する上で格好の材料になり得る。一方、もう一つのトピックである「京都」では、日本語学習者なら一度は訪れたいと思う京都の伝統的な和菓子や和食の盛り付け、友禅染などを紹介した。このように日本文化講義は現代のサブカルチャーと伝統的な日本文化の両面を理解できる構成として組み立てた。

本プログラムは韓国の協定校が対象で、初級の学生も受け入れていることから、韓国人教員が韓国語を使って講義をした。また、各講義後のレポートや感想文で日本文化講義の評価を行った。

4.3.1 「J-POP」講義

この講義ではテーマを「J-POP から見る日本文化の一断面 ～K-POP との比較を通して～」と掲げ、様々なジャンルのアーティストの PV や週間ランキングを見る等、楽しみながら受講生それぞれが J-POP を感じ取るように工夫をしている。

具体的には、最近の J-POP の傾向をオリコンチャートなどで把握し、日本のアイドル・オタク文化と日本式プロデュースについて紹介した。また、J-POP におけるファンと歌手との関係、ファンがアーティストに求める要素には K-POP の場合と隔たりがあり、日本の文化的な背景も知ることができる。

このように日本語や通訳を介さず、母語による講義が提供されることは、日本文化に関する表層的な紹介に留まらず、深いところまで理解できるという意味で有意義であると考えられる。

授業内容としてはこの他にも、J-POP をめぐる巨大な音楽産業、Cool Japan や Japan Expo と称される文化コンテンツとしての音楽、アニメーションと J-POP とのコラボレーションについても取り上げ、日本のサブカルチャー全般への総合的な理解を図った。

4.3.2 「京都」講義

この講義では京都の代表的な文化を取り上げることで、日本の伝統的文化に対する理解の広がりを目指している。まず、2013 年にユネスコ無形文化遺産に指定され、外国人からも関心が高まりつつある和食について、京料理の盛り付けや和菓子を紹介

した。グループに分かれて画像や写真を見ながら、どの季節の盛り付けなのか、何月を楽しむ和菓子なのかをクイズ形式で当てるアクティビティを通して受講生の参加を促した。和食にまつわる年中行事や和菓子を楽しむ「場」の風情についても教員が適宜説明を加え、受講生は食文化に込められた日本人の季節感や色彩感覚、おもてなしの心を感じ取る活動になったと思う。

また、友禅染からなる日本の着物の魅力や金閣寺の歴史・建築様式についても概略し、少しずつではあるが、日本の伝統的な美に触れるきっかけになることを目指した。

4.4 日本文化体験

日本文化体験は、文化講義や日本語授業と関連させた京都フィールドトリップと、単位外で本学の文化部に協力を依頼した伝統文化体験とがある。

京都フィールドトリップでは、友禅染体験、和食体験（昼食）、金閣寺見学、和菓子作り体験を行った。友禅染体験では好きな色の風呂敷に、好きなデザインを選んで染め、完成後はお土産として持ち帰った。金閣寺見学では集合写真を撮るなどして、日本の観光地訪問を楽しめるようにした。和菓子作り体験では京都の町屋風の店で3種類の季節の和菓子を作った。これらはすべて韓国語による文化講義で事前に学習を終えてから、体験を行っている。和食体験はその他の体験とはやや異なるが、文化講義で京料理の盛り付けについて学んだ後の体験であり、色や形など学習したものと結びつけることができた。

伝統文化体験の協力を依頼したのは本学の能楽部、書道経験のあるボランティア学生と職員、生け花部である。能楽体験では能楽の説明を受け、実演を見学し、その後着付け体験を行った。書道体験では日本語だけでなく、韓国語も書き、部員たちとお互い教え合いながら書道を楽しんだ。生け花体験では2人1組で実際に花を生ける体験をした。いずれも本学の学生がボランティアで協力してくれた。単位外であるため、事前学習は行っていないが、体験の中で部員たちによる説明や実演があった。また、同世代の日本人学生と交流しながら伝統文化を体験できる機会でもあった。

友禅染、和食体験、和菓子作り、能楽（着付け）体験、書道体験、生け花体験の6つの体験は、日本文化を見るだけでなく実際に体験をするという本プログラムの目的を達成するために実施したものである。

5. アンケート結果とふりかえり

5.1 アンケート概要

授業最終日の合同発表終了後に、受講生 24 名全員を対象にプログラムを振り返るアンケートを行った。プログラムに関わったコーディネーターおよび授業担当者が日本語でアンケートを作成し、韓国語に翻訳したものを受講生に配布した。

24名全員が韓国語（一部日本語での回答もあった）で回答し、韓国語のコメントは日本語に翻訳し、コーディネーター、授業担当者、担当職員で共有した。

5.2 日本語初級クラス

初級クラス 15名の日本語クラスへのアンケート結果は、多くの項目において5段階評価の「5（とてもよかった）」と「4」であり、概ね良い評価が得られた。

日本語の上達度としては、プログラム前半の授業で行った「食事（注文）する」等7つのトピックのほとんどにおいて、11名～15名が「5（とても上達した）」または「4」と回答していた。コメントでは「教室だけでなく、実際に体験して話したので、日本についていろいろわかるようになった」、「日本語の授業のおかげで一人で日本を旅行することができた。店員の言葉は全てを理解することはできなかったが、基本的な会話は可能だった」等の意見が挙げられていた。このことから、未習の学習事項が多かった受講生が、日本語パートナーとの実践や実生活での体験を通して、上達を実感していたと思われる。

一方、プログラム後半の「J-POP」と「Cool Japan」の発表の上達度では、「3」と回答した受講生が5名～7名と他の日本語の授業より多く、「たくさんの練習が必要だと思います。書くのはずいぶん楽になったけど、しゃべるのはまだ大変なところがあり、もっと時間をかける必要を感じました（後略）」といったコメントが見られた。これは、プログラム後半では、よりまとまりのある日本語を一人で使うことが求められたこと、自らの口頭発表能力の上達を自己評価できなかったこと等が要因ではないかと考えられる。しかし、教員から見れば、受講生の口頭発表能力には明らかな伸びが見られた。今後、発表に向けた準備・練習の時間を十分確保するとともに、受講生の自己評価方法を取り入れる等の工夫が必要であろう。

授業の難易度では「クラス間のレベルの差が大きすぎて少し大変でした。レベルをもう少し細分化すればよかったと思います」等のコメントが見られた。初級クラスはひらがな・カタカナの読み書きができることが受け入れの前提であったが、実際にはゼロ初級の受講生も少なくなかったため、このような結果が出たと考えられる。

最後に、授業で習ったことの役立ち度では、「日本語パートナーとの活動で役に立ったか」は「5（とても役に立った）」が7名で「4」が7名、「日本で生活するときに役に立ったか」は「5（とても役立った）」が8名で「4」が7名であった。回答では「まだ完璧な会話ができるわけではないが、尋ねるのはずっと楽になり、以前に比べて聞き取りも上達した」と述べていることから、ゼロ初級で来日しても日本で実体験を通して学習できたという満足感が日本語の授業で得られたと思われる。

5.3 日本語中級クラス

中級クラス9名の日本語クラスへのアンケート結果は、ほぼすべての項目への回答が「5（とてもよかった）」と「4」となっており、概ね好評だったと考えられる。

プログラム前半に行った「自分の1日について話す」「感想を述べる」などの7つのトピックの上達度に関しては、「5（とても上達した）」と回答した受講生が9名中8名～5名で、自由記述でも「ロールプレイで実生活の会話が学べてよかった」、「自分が何かを説明したり、伝えなければならないシチュエーションを発表することがより役に立った」等、多くの受講生が自身の上達を実感していたことが伺える。

また、プログラム後半の口頭発表についても、最終発表の「Cool Japan」発表では、9名中「5（とても上達した）」が5名、「4」が4名であり、自由記述でも「Cool Japan」を準備する過程が面白かった」、「自信、実力ともに身についた」等、最終発表にふさわしい達成感が得られたようである。

授業の難易度については「日本語実力のアップに役立ち、授業内容や教え方もよい授業だったが、中級と上級の区別がなく、難易度の面でとても大変だった」、「クラスを初級・中級ではなく、初級・中級・上級に分ければいいと思う」等の自由記述が見られた。プログラムの概要でも述べたように、本プログラムは初級、中級に限った募集であったが、実際には様々なレベルの受講生がいたことから、このようなコメントが出たのであろう。

全体的な授業で習ったことの役立ち度に関しては、「日本語パートナーとの活動で役に立ったか」は「5（とても役に立った）」が8名、「日本で生活するとき役に立ったか」は9名全員が「5（とても役に立った）」と記述するなど、包括的には日本語授業を各自十分に活用できたと感じていたことが伺える。

5.4 日本語パートナーとの活動

日本語パートナーとの活動へのアンケート結果を見ると、交流授業や日本語授業内の活動については、中級クラスは全員が「5（とてもよかった）」、「4」を選択しており、満足していることがわかる。初級クラスは「5（とてもよかった）」、「4」が多いが、「3」もやや見られた。後半の口頭発表のうち「J-POP」の発表で「3」を選んだ受講生が15名中7名とやや多かった。一方で「Cool Japan」の発表では「3」は3名のみであった。「J-POP」の発表は口頭発表のみであるのに対し、「Cool Japan」の発表はPPTを使用しての発表だったためPPT作成等の発表準備に日本語パートナーが携わった部分が大きかったためではないかと推察される。

日本語パートナーとの活動での日本語使用率を見ると、中級は全員が「5（全部日本語で）」、「4」を選択し、初級は「5（全部日本語で話した）」が1名、「4」が4名、「3」が10名であった。ひらがな・カタカナしか知らない初級の受講生が多

かったことから考えると、「1（全く日本語で話さなかった）」、「2」を選択した受講生がおらず、学んだことを使ってできるだけ日本語で会話をするという目的は十分に達成できていたと考えられる。また、いずれのクラスも「1（全くよくなかった）」、「2」の選択がないことから、日本語パートナーとの活動には満足していると言えよう。

5.5 日本文化講義

日本文化講義の「満足度」に関する設問では、先生の教え方、内容・プリントともに概ね肯定的な結果が得られたが、難易度において「3」と答えた受講生が6名いた。日本の伝統文化に対する知識が乏しい受講生も含まれていたため、和歌や寺院の沿革に関する内容においては多少難しさを感じたものと思われる。

次に「理解度」に関する設問では、友禅染・金閣寺→食文化→J-POPの順に理解が上がる結果となった。この順番は各トピックに割り当てられた授業時間数とも一致している。十分な時間が確保できていないトピックもあるため、今後取り上げ方について検討したい。

本プログラムの文化講義をきっかけに、「漠然としていた文化に対してより関心を持つようになった」、「たくさんの興味を持つことができた」等、日本文化や日本語学習への関心を示した受講生が多数いたことから、一定の成果が得られたと思われる。

5.6 日本文化体験

京都フィールドトリップの満足度を見ると、友禅染体験は「5（とてもよかった）」「4」が24名中23名、金閣寺見学は18名、和菓子作り体験は21名で、概ね満足していることがわかる。自由記述で「体験ができて楽しかった」、「和菓子作りの体験、最高!」、「友禅染が一番良かった」等、体験が良かったというコメントが見られることから、実際に体験することができた友禅染体験と和菓子体験への満足度が高かったものと思われる。金閣寺は見学であり体験ではないということと、見学時にかなりの雨が降っていたことが、満足度がやや低かった要因ではないかと考える。

文化部に協力を依頼した伝統文化体験への満足度は、能楽部体験が「5（とてもよかった）」、「4」が24名中19名、書道体験が16名、生け花体験が15名であった。書道体験では「日本だけの文化として限定するのは排他的な態度だと思う。だから、「日本」文化体験という気がしなかった」というコメントもあり、韓国にもある書道を体験するのではなく、日本にしかないものを体験したいということだと思われる。似ているものがなく日本にしか存在しない文化が日本文化ではなく、似ていてもその中に違うところもある日本文化を体験するということを説明する必要があるかもしれない。生け花体験については、「全く理解できなかった」、「生け花の世界は広いと

感じた」というコメントがあり、1回の体験では理解が難しかったのかもしれない。

5.7 プログラム参加による関心の変化と満足度

プログラム参加による関心の深まりでは、「日本語への関心」、「日本文化への関心」、「日本人との交流」についてはいずれもほぼ全員が「5（とても深まった）」、「4」を選んでおり、受講生がプログラムに参加したことで、これらについての関心を深めたことがわかる。

プログラム全体の満足度についても、全員が「5（とても良かった）」、「4」を選んでおり、プログラム全体についても好評であったと言えよう。

プログラムに参加してよかったことを「日本語の上達」、「日本文化についての理解の深まり」、「日本人の友人ができた」、「その他」から順番をつけた結果を見ると、「日本語の上達」は24名中22名が選択し、9名が1番に選択した。「日本文化についての理解の深まり」は23名が選択し、9名が1番に選択した。「日本人の友人ができた」は24名全員が選択し、6名が1番に選択した。また、プログラム参加で最も得られたことに対する自由記述を見ても、「今まで韓国でアニメーションや放送などの文化コンテンツだけで接してきた日本について、体で直接感じて体験することができ、非常に満足のいく研修となった」、「恥ずかしがらず一言でも多く口に出すことで、実力がつくという自信」等のコメントが見られ、短期プログラムで得たものが大きかったことがわかる。

6. おわりに

2013年度に実施した短期プログラムを振り返り、日本語授業・交流授業・文化講義・文化体験を有機的に結びつけた工夫について述べた。

各プログラムの活動内容やプログラム全体に対する評価から、受講生が本プログラムの内容に満足していたことがわかった。日本語の上達、日本文化についての理解、日本人の友人を作るといった本プログラムが目指した点についてもほぼ全員が参加して良かったこととして挙げており、短期プログラムへの参加に効果があったと受講生が感じることでできるプログラムであったと言えよう。

受講生の「午前には主要な表現を学び、午後にはパートナーとの活動を通してすぐに応用できるように企画されていたのが非常に良かった」等のコメントからも、単に日本語の授業だけで学習が終わるのではなく、各活動内容に連携を持たせたプログラム内容について評価していたことがわかる。本プログラムの実践とアンケート結果から、各活動を有機的に結びつけることが、受講生の満足感を満たすために有効であったと考える。今後、短期プログラムを実践する際に、活動間に連携を持たせたプログラムを実施することで、学生の満足度を高めうる可能性が示されたのではないだろうか。

参考文献

阿部美恵子（2012）「活動報告：短期集中日本語・日本文化体験コース」『関西学院大学日本語教育センター紀要』創刊号

阿部美恵子（2013）「短期集中日本語・日本文化学習コース」『関西学院大学日本語教育センター紀要』第2号